

農林水産大臣賞受賞

受賞者 板荷畑いつくし美会

(栃木県鹿沼市)

【未来につなぐみんなの美しいふるさと】

1 取組の動機と背景

板荷畑地区は、鹿沼市北部に位置し、東西は山林に隣接し、中央部を貫流する一級河川行川支流長畑川流域に水田が、西部の山林隣接区域に畑が分布している。

当地区は、担い手農家がほとんどなく、農作物の野生鳥獣被害の増大、農業者の高齢化による耕作放棄地の拡大等により、農業の継続や環境の維持保全に対する不安を抱えていた。このため、平成19年度に国の交付金事業「農地・水・環境保全対策事業交付金(現 多面的機能支払交付金)」を活用し、住民が連携した取組に発展させることで課題解決が可能と考え、「板荷畑いつくし美会」を設立した。当会を運営するにあたり、課題やニーズ、今後の地区の核となる若い世代の農業・農村に関する考えを把握し、合意形成に取り組む必要があるとの意見から、地区住民へのアンケート調査を実施し、課題の解決を優先して取り組み、少しずつ成果を上げることで、当会の信頼を高め、住民との連帯感と活動への意欲を高めてきた。

その結果、野生鳥獣被害対策、耕作放棄地解消、生きもの調査、無人農作物直売所開設等の取組などを通じて「行動すれば地域が変わる」という意識も芽生え、新たに農村レストランの設立に向けて農村の活性化に意欲的に取り組む機運が高まっている。

2 主なむらづくりの内容

- 野生鳥獣被害の防止のため、野生鳥獣対策組織を立ち上げ、宇都宮大学、地区住民全体の協力を得て、地区全体を囲うように防護柵を設置するとともに、耕作放棄地の解消のため、30代から50代で構成される地域の後継者組織「鹿泉会」が中心となり、そば栽培に取り組んでおり、その取組は「世界で一番小さな板荷畑そば祭り」の活動へ繋がっている。
- 耕作放棄地対策活動の中心となっている「鹿泉会」など、若い世代に対して活動への参加を促すことで、農業に対する意識の変化も生まれ、組織活動の継続や地域農業を将来に繋ぐ人材の基礎づくりに繋がり、6名の認定農業者が誕生している。また、新規作物研究会立ち上げ、野生鳥獣の被害を受けにくく地域特産物となりえる新規作物「マカ」の契約栽培を積極的に行うことで、企業等に勤める兼業農家の定年退職後の営農活動を支援するなど、農家の所得向上や新規就農に繋がる活動を行っている。
- 自家用野菜の有効活用と新たな農業経営の可能性を探るため農作物直売所を設立し、無人販売の形態でありながら年間100万円を超える売上までに成長している。この直売所の構成員は、8名の内65歳以上の高齢者7名、内5名は女性であり、直売所に欠かせない存在として、生き生きと活動に参加している。また、子どもたちとの地域の環境学習を、女性(母親)主体の育成会と連携して実施するなど、女性の活躍の場づくりを進めている。
- 「世界で一番小さな板荷畑そば祭り」の開催や「無人直売所」の経営などの知見を活用し、本地区の生活センターを改修し、農村レストラン(地粉そばを提供するそば店)と有人の農産物直売所を地域の拠点施設として整備・活用することで、一層の交流人口の拡大を目指すこととしている。

3 むらづくりの推進体制

